

潮流



NPO法人未来副理事長  
鳥取県中部医師会副会長

「プレー・パーク」は「冒険遊び場」とも呼ばれ、「冒デインマークをはじめヨーロッパを中心に広がった新しい遊び場で、「自分の責任で自由に遊ぶ」場として、子どもたちの好奇心や欲求を大切にし、秘密基地づくりや木登り、穴掘り、泥んこ遊びなどさまざまな遊びの中で、子どもの自由な発想や独自性、自主性を尊重

松田 隆

した遊びを実現できるようプレーリーダー(子ども)の遊びを支える大人)も支援されながら自然の環境や水・土・木・火等の公園などのお仕着せの遊び場と違い、一見無秩序のように見えて、子どもも利用して、五感を使つた体験ができるようになつています。しかし、今の子どもたる力は発揮されません。

力は発揮されません。

遊びをつくり出すことのできる遊び場です。

その中で、常駐のプレー

一九四三年、コペンハーゲンに世界で最初のプレー・パークとされる「エンドラップ廃材遊び場」を創った造園家ソーレン・センは、子どもたちはこのスタンスをとることによって子どもが自由に遊べる空間を保証しています。立され、一九八九年の国際子どもの権利条約採択に際して、IPAは権利条約に遊び場の条項を入れるために働きかけ、第一〇二条に入れられました。

日本では、一九七九年に住民による遊び場運動と区行政の健全育成事業とが連携し、国際児童年の記念事業として世田谷に羽根木プレー・パークが常設され、現在百九十を超える冒險遊び場活動が取り組まれています。生活地域の中で思い切り体を動かして遊べる日常空間ができ、子どもを取り巻くさまざまな市民グループが規制され、子どもの遊び環境が貧弱化していく

# プレー・パーク

ちは、家中でテレビやゲームやケータイに費やす時間が多く、この五感を使った体験ができる場がなく、意識的にこのような自由な発想の場をつくることが必要です。子どもは遊びの天才といわれますが、自由に遊べる

自由な遊びの中には、多少のケガや事故は当たる空き地や資材置き場で喜んで遊んでいるという

た。

た。